On "In Seventeen", the Manuscript by Tanabe Seiko

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: NAKA, Shuko メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3860

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大阪樟蔭女子大学研究紀要第三巻（二〇一三）

研究論文

田辺文学の原点
ー少女時代の作品「十七のころ」ー

学芸学部　国文学科　中　周　子

要旨：田辺聖子が樟蔭女子専門学校時代に書いた「十七のころ」の自筆原稿が発見され全文が公開された。従来、自伝小説『しんこ細工の猿や雉』の中に紹介されて題名だけは知られていたが、所在も全文も不明であった作品である。本論文は「十七のころ」の本文を分析し、後の田辺文学に通じる手法や主題が見いだせることを指摘した。すなわち、田辺聖子の得意とするユーモアに満ちた軽妙洒脱な文体、大阪弁を駆使した巧みな会話による人物形象、田辺聖子が一貫して書き続けた戦後の女性の生き方という主題である。さらに、十七歳で終戦を迎えた体験から、十七歳が田辺聖子にとって特別な意味を持つこと、自伝小説『欲しがりません勝つまでは』の中に描かれた、自らの意思によって真の人生を歩み始める十七歳の少女の原型が、「十七のころ」の主人公であることを指摘した。「十七のころ」は田辺文学の原点と位置づけられる作品であることを論じた。

キーワード：田辺聖子、「十七のころ」、大阪弁、第二次世界大戦

はじめに

田辺聖子が樟蔭女子専門学校時代に書いた作品「十七のころ」の原稿が発見された。B5のルーズリーフ四枚に書かれた未発表の短編である。その全文は、住友元美氏による要を得た解説を付して『樟蔭国文学』に掲載された(1)。掲載後、文化勲章受章作家の未発表作品発見のニュースは、読売、朝日、産経各新聞に大きく取り上げられた(2)。

しかし、「少女時代の習作」が発見された事実のみが重要なのではない。十七歳の頃に書かれた作品が、早くも、後の田辺文学を彷彿させるほどの達成を遂げていることこそが、注目されなくてはならない。

田辺聖子は十三歳の頃から、大学ノートに、あるいは級友に回覧する手作りの雑誌に、中国やドイツを舞台とした作品、いわば、冒険譚、ツクリモノの物語を書きつづってきた(3)。そのような少女時代の作品群の中で、「十七のころ」は、人間と時代を見つめる冷徹な目と、ずば抜けた文章力を以て、真摯に女性の生き方を探る出色の短編である。

本稿では、作品本文の分析・考察を通じて、「十七のころ」が「習作」という範疇に納まりきらない完成度の高い「短編小説」であり、田辺文学の原点として位置づけられるべき作品であることを論じたい。

1、「十七のころ」発見の意味

作品の主人公は、内気な少女、十七歳の泉である。裕福な家庭の一人娘で、戦後の混乱期にもかかわらず、嫁入り修行の為に洋裁学校に通い、お茶やお花を習っている。両親に可愛がられ何不自由無い生活を送っているのだが、両親の価値観や自らの生活に疑問を抱き、真の生き方を求めている。ある日、洋裁学校へ行く道中、女学校時代の先輩良子と出会う。働きながら女子医学専門学校に通い、在外父兄救

出等の社会活動にも関わっている彼女の生き方に触れ、泉は鋭い刺激を受ける。帰宅後、興奮して母親に話すが、俗物の両親には理解されない。真の生き方とは何か、答えを探しあぐねて泉は呆然とする。

登場人物は、主人公の泉、彼女の父母と友人の、わずかに四人である。場面は泉の家と通学路の二ヵ所。時は晩春から初夏へと移り変わる二日間。限られた人物と場面と時間の中に、十七歳の少女の内面の葛藤を描いた作品である。人物や場面展開の説明に字数を費やす必要が無い、単純な場面構成と人物配置。すでに短編小説の手法を習得しているというべきであろう。

この作品は発見される前から、題名だけは知られていた。田辺氏の自伝小説『しんこ細工の猿や雉』[4]の中で、「十七のころ」を執筆した事情が紹介されているのである。

そこでは、昭和二十年当時の学園の様子と自らの少女時代を振り返って、こう書かれている。

終戦後の学園は息をふき返したように活気をとり戻して、校友会のいろんな部が生まれていたが、生徒もまた、息をふき返したような子がたくさん出て来た。

活発で、人前に出て物おじせず、集会をリードし、水に放たれた魚のようにイキイキしている。そういうのは、戦時中にはないタイプである。私は絶対にそんなタイプではない。

そんな活況の中で文芸部が生まれ、田辺聖子は編集長を押し付けられてしまう。「わたしいややわ。そんなん、きらいやねん」、「むりにさしたら、泣いたるから」という抵抗もむなしく、「ええやないの、ややこしいことができたら、わたしらで肩代わりするから。ともかくあんたはいつも小説書いてるし、文学趣味があるんやから適任やないの」と言いくるめられて、結局、田辺聖子は編集長を引き受けてしまう。『青い壺』という機関誌を編集し、自らも「十七のころ」という短編を載せることになる。

生徒はどんどん短歌や俳句を投稿してくる。そうして、

「本はいつでますか」

と期待して聞きにくるのだった。仕方ない。

まだ町には印刷屋もないので、学校から原紙と紙をもらい、生徒が交代でガリ版を切った。下級生の保育科の人が、芋版で表紙のイラストを仕上げてくれて、ハカナゲなガリ版の機関誌「青い壺」はでき上がった。

百五十冊刷ったが、またたくまに売れてしまった。誰もかれも読み物に渇えているらしかった。

小説がないと格好つかない、というので私はここに「十七のころ」という短編をのせている。これは十七歳の泉という、口数少ない、おとなしい夢みがちの女の子と、俗人の代表のような両親との対比をねらった小説で、それだけのものである。われながら低調で冴えなかった。

『青い壺』は実在する機関誌である[5]。その体裁（表紙の絵やガリ版であること）は上記の引用文の通りで、編集後記も田辺聖子が書いている。『しんこ細工の猿や雉』の、このくだりが、ほぼ事実に基づいて書かれていることは間違いない。

ところが、『青い壺』第一号に掲載されている田辺聖子の作品は「ゆみ子」と題する短編である。主人公のゆみ子は二十歳で、十七歳ではない。内容も、兄の友人への淡い恋心を描いたもので、「十七のころ」とは、全く別の作品である。

この点は、長らく疑問であった。掲載した作品に関しては事実ではなく、終戦当時の自らの年齢によって、架空の題名を創作したのだろうか、と考えるしかなかった。しかし、「十七のころ」という作品は実在した。自伝小説『しんこ細工の猿や雉』の内容を裏付ける資料が出現したのである。然も、発見された「十七のころ」を読むと、後年の自伝小説の一資料に留まるものではないことがわかる。「習作」というよりは、むしろ、爾後の作品群に連なる文体と内容を備えた「秀作」なのである。

2、作品の冒頭場面～会話の巧、対比の妙～

「十七のころ」は、主人公・泉の紹介に始まる。

泉が、平凡な少女だといふ事は誰しもが認めてゐる事だった。彼女はすぐ耻かしがるし、人との対話のときには、ろくに眼もあげず、母親のとり子に言はせると「物の役にも立ちさうに」見えなかった。買物にやらせると、きまつて釣銭をまちがへ、挨拶させると必らず絶句した。そしてトマトのやうに赤くなり、口ごもって、もご〳〵と言ってゐた。誰も、おとなしい娘さんで、とほめたが、「泉つたら、だめですよ、ほんとに十六にも十七にもなつて」、と母親は口やかましかった。

母親の口癖は、そのまま泉に話しかける台詞となり、さらに泉をめぐる父親との会話へと展開する。冒頭場面では、晩春の夕べを過ごす家族の様子が描かれる。

「挨拶ひとつ、出来なくては困るぢゃないの。そりや、よその娘さんはしつかりしてますよ。十七にもなれば昔は結構一人前の女ですもの、泉はどうしてこんなに気が弱いんでせうねえ、お父うさん」

春の夕方だった。父親は太ってゐるので暑がって、もう肌脱ぎになり、食事のすんだ散らかった食卓を前にして、膨れた腹をつき出して、楊子で歯をせせくってゐた。彼は、生え抜きの大阪人なので、関東で生まれた、とり子が嫌ふ大阪弁が威勢よく口をついて出た。

「なんや、挨拶、そんなもん、今から修行せんでも、年ごろにはなんぼでもできる。心配せんでもえゝ。」

「お父うさんたら、又」

とり子は不満足さうに呟き、食卓の後片づけを始めた。泉は、ぼんやりして打水をした薄暗い庭を眺めながら両親の話に耳を傾けてゐた。

「女の子といふものはだいたい、あなた……」

「そら又、おまへの十八番が始まったがな」

「だって私は心配なんですよ。この子は一人娘ですもの……」

「お前の思ふ様にこづき廻したいねやろ。ほっといても娘なら、心配はいらんわ。」

父親は掃ききよめた奥座敷へ移って、煙管を捜して一ぷく吸ひつけ、周囲を見廻した。泉が見えないので庭に向つて呼んだ。

「いづみィ。どこぞ行たんか」

「部屋へあがりましたよ」

「何時のまに行きよつたんや。屁みたいな奴ちやな」

この短い冒頭場面を読むだけで、登場人物たちの輪郭が、くっきりと読み手に印象づけられる。どこにでもいそうな甲斐甲斐しい心配性の母親、太り気味の磊落な父親、両親のやり取りを黙って聞きながら、そっと自室に逃げ出す大人しい一人娘。登場人物それぞれを際立たせているのは、巧みな会話文によるものである。

泉はひとことも口を挟まない。両親との会話を書かないことで、彼女の性格を表現している。その意味で、三者三様を形象する手法として、会話の巧さが注目される。

関東生まれの母親と生え抜きの大阪人である父親。やや神経質な母親と無神経ともいうべき磊落な父親。饒舌な両親と寡黙な娘。種々の要素を対比させて作品は構築されている。中でも、父親の大阪弁は、母親の東京弁との落差によって強烈な印象を与える。「会話」と「対比」はこの作品を読み解く鍵といえよう。

3、巧みな会話文

まずは、作品中の会話に注目してみよう。中でも、ひとり大阪弁を話す、生粋の大阪人である父親の台詞は、大阪弁特有のテンポの良さがうまく表現されている。

目の前にいない娘を呼ぶ台詞は「いづみィ。どこぞ行たんか」と表記されている。同じような状況での母親の台詞、すなわち一階から二階の娘に呼びかける台詞は「泉ちゃん頼みますよ」である。「いづみィ」と「泉」の、たった一語を書き分けることで、両者のまったく異なる口調を表している。大阪弁を知る者には、「いづみィ」と娘を呼ぶ父親独特の「声色」までもが、聞こえてきそうである。

芥川賞受賞作品「感傷旅行（センチメンタル・ジャーニィ）」の例を挙げるまでもなく、田辺聖子の小説には大阪弁を駆使した作品が多いが、カタカナの小文字を用いて大阪弁を表記する方法を好んで用いている。その工夫について、田辺聖子はこう語っている[6]。

「やっぱり大阪弁を文字にする時に『こうは書かない』というのがある」という

のである。例えば、文中に「そうでんねん」という言葉を書く場合、「ひらがなの『ん』をそのままで『そうでんねん』と大きく使ったりしてしまうと、大阪の人間から見たらカッコ悪い」という。故に、『ん』は軽い音になるので、そこを小さなカタカナの『ン』を右寄せにして『そうでンねン』としておけば実際の音に近くなる」という具合である。

冒頭場面以外の箇所でも、「止めときィ」と母音をのばす大阪弁の特色を「ィ」を用いて表している。「十七のころ」執筆時から、すでに大阪弁をいかに文章に書くかに腐心していたことが窺われるのである。

泉の言葉を書くときにも工夫がある。「口ごもって、もごもごと言う」と描かれていて、無口な性格であるため台詞は少なく、また短く簡単な返事が多い。そのような泉の台詞には、「――（ダッシュ）」や「…（三点リーダー）」が多用されていて、彼女の性格をよく現わしている。

① 母親に話しかける台詞　「わたし――明日休みたいんだけれど……」
これは「母親の傍へ蹲んで小声で言った」と説明され、いかにも大人しい娘の様子が描き出されている。

② 母親に抗弁しようとする台詞　「えゝ、けれど……」
しかし、この言葉以上には何も言えず、「すっかり悄気切って首を傾けた」のである。親に抗おうとしても、最後まで言い募ることが出来ない性格が描かれる。

③ 道で先輩良子に出逢った時の台詞　「あら……ごぶさたして――」
良子に、後ろから肩を叩かれた泉は「突然驚かされたので真っ赤になって口ごもった」のである。「口ごもった」のは突然に驚かされたためばかりでなく、「癖で」と泉のいつもの性格であることが書かれている。

④ 良子に近況を聞かれた時の台詞　「べつに何も――」
「口の中でのみこんだことばは、妙に、心にこびりついた」と説明が続く。良子こそ自分の望む生活を送っていると感じて、話したいのだが言葉にならないのである。

⑤ 近況を語る良子への返事　「さう――」
良子が語る、新しい時代にふさわしい充実した毎日に圧倒されるが、その感動は伝えることは出来ない。良子の「(なんて、反応のない人だらう)」という思い、泉の「すっかり自己卑下に陥って、まゐってしまった」様子が描かれる。

⑥ 母親に必死に抗弁する際の台詞　「やだ、やだ、お母さんたら……」
良子との出会いに刺激されて、母親の古い価値観に反発する。この場面でのみ、泉は「熱にうかされたやうに、赤いほてった顔をして」雄弁に長い台詞を語る。
「お母さん、あたし、今日、良子さんに会ったの。あのひと偉いのよ、そりやあ。自分で、お金もうけして勉強してるし、いろんな団体で活躍してるし……　あたしも、どこかへ――とても急がしさうな所へ勤めようかな」
「でも――何だか、かうしてくらしてゐるの、世間の人たちに済まない気がするの。そして何か、今、この若いうちに精根こめてやれる仕事がしてみたい……」
この長い台詞においても、「――」や「…」が用いられ、口ごもりながらも懸命に自己を表現する様子が描かれている。
これらの泉の台詞にのみ多用されているダッシュや三点リーダの記号によって、自分の気持ちが言葉にならない、もどかしさが伝わってくる。
このように会話文によりそれぞれの人物が形象されている。巧みな会話文の書き手としての才能は、早くもこの作品中に窺えるのである。

4、対比の妙

作者本人によって「俗人の両親との対比をねらった」小説と語られているが、この作品には、他にもさまざまな要素の対比が目立つ。
両親についても、関東と関西という出身地、標準語と大阪弁という言葉遣い、心配性と放任主義という娘に対する態度、浪速節とジャズ好きという趣味等々、対比的なデティールを書き込むことで、リアルな両親像が造形されている。しかし、父母は旧式な価値観の持ち主である点は同じで、泉を箱入り娘として育て、嫁入りさせることだけを望んでいる。そのような両親の望む娘像に対比されるのが、良子の存在である。
良子は、自活しながら女子医学専門学校に通い、戦後日本の混乱期を支える社会活動に参加し、文化の復興を推進する学生たちの文化活動にも参与している。泉は、「良子こそは彼女が望んでゐた新しい生活の扉を開く鍵をにぎる人間ではあるまいか」と思うのである。

作品中には、泉が目にした良子の活動の一コマが書かれている。

救出学生同盟の腕章を巻いた学生たちが今着いた列車から降りた引揚者の世話をしてゐたり、固まって、援護資金募集のために映画の切符を売ってゐた。泉がそばを通りすぎると大学生たちの中から、女医専の生徒が、笑つて頷いた。良子だった。手にメガフォンを持って叫びはじめた。（中略）

「……気の毒な引揚者の方々のために、ひとへに皆様の御協力をお願ひ致します」

良子に出会った昂奮から、意を決して働きたいと言う泉に対して、両親は全く理解を示そうともしない。母は、「親も親だねえ、娘の子を町のまン中へ、おっぽり出して、格好の悪い苦学なんぞさせて」と良子の親をも非難する。そして、良子を「女の子らしくない、理屈っぽい女医専の生徒」と決めつけ、「つきあったらだめだよ。ほんとに」と泉に命ずる。父親も、「おまへは要らん心配しいな」「おまへは、ちゃんとした、いとはんやさかい、家にゐてたらえゝのや」と取り合わない。良子の生き方を「女の子らしくない」「格好のわるい」としか見ない母、彼女の社会活動を「要らん心配」としか捉えない父。

しかし、良子の活動、在外父兄救済学生同盟や文化活動は、戦後日本を復興させるいかに重要な活動であったことか。戦争終結後に、日本の将来を真剣に考え行動していた学生たちの活動は、戦後日本が驚異的な復興を遂げた原動力の一つであったことは確かである。当時の新聞にも「在外父兄救出学生大会」が全国的に展開することが報じられている[7]。

しかし、良子を、娘に悪影響を与える存在としてしか見ない両親の眼中には、自らの生活しかない。

平蔵が刷りたてのインクのにほふ新聞を、ばさ〳〵と下げてやってきて言った。

「又、親子心中や、この頃はよう心中しよる」

「これからいよ〳〵生存競争や。つまりは貧乏人が死んでゆかんならん。弱肉強食といふことや」と、彼は新聞記事に註を施した。

当時の生活物資の不足は連日、新聞記事となっている。「親子四人服毒心中、生活に敗れ無惨」といった見出しで大きく報じられた、生活苦が原因と推測される痛ましい心中事件も度々起こっている[8]。新聞記事となった事件は氷山の一角で、おそらく同種の悲しい事件は全国的に数多く起こっていたであろう。そのような時代のただ中で書かれた作品であることを思う時、何不自由ない食事の描写、食事風景はとたんに醜悪な様相を呈してくる。

父親が新聞を下げてやってきたのは、「味噌汁の香がかんばしくたちこめてゐる茶の間」で「湯気のたつ御飯をよそってゐる」時である。新聞記事に「弱肉強食といふことや」と注を施した父親は、「ちゃっちゃっと舌を鳴らして貪り食ひ、ごとごとと音を立てて味噌汁を吸うてゐる」。

この時、泉が父親を見つめる目は冷たく厳しい。

彼の太った猪首だの、たるんだ、そして突き出た腹だの、毛の生えた短かい太い指だの、濁った眼だの、禿げた頭だのを泉は殆んど生れて始めて、と云ついゝ程の酷薄さを帯びた痛烈な瞳でみつめた。父親といふ観念から離れて――。

作品の背景である時代、第二次世界大戦後の社会について作品中に語られることは、少ない。しかし、泉を取り巻く戦後の悲惨な世相と、平穏な家庭内の日常との対比の中で、泉の現状に対する懐疑が描かれる。新旧の価値観の大きく移り変わる中で、女性としての自らの生き方を模索して苦悩する泉が描かれるのである。

5、泉の苦悩

「十七のころ」は俗物の両親との平穏な生活に懐疑を抱き始めた泉が、新しい時代を創造する意欲に燃えて生きている良子に出会い、真の生き方に目覚め成長する小説であると、ひとまずは言えよう。しかし、作者がこの作品で描こうとしたものは、そのように単純なテーマに還元できるものではない。

様々な場面で繰り返し描かれる泉の懐疑と不安、彼女の苦悩を追ってみよう。

事なく明け、事なく暮れる一日の終り、毎夜一ときは、突然襲ってくる深い絶望と暗い虚無感に、彼女の世間知らずな、うぶで、かよわい魂は脆くも圧しつぶされさうだった。（中略）

彼女は、もはや昼となく夜となく平穏な一瞬間をねらっては、ぐい〳〵と緊めつけてくる、得体の知れぬ無気味な魂の圧迫感に、塞がれて、息もつまりつゝ、敢然と対抗しようと決心した。

このように書き出される泉の苦悩は、さらに日常の一場面の中に具象化される。朝の身支度をする場面、泉は鏡に向い、髪を梳かし白いリボンを結ぶ。その時のこと。

「赤いのにしなさいよ。棒縞の」

いつのまにか、とり子が後に立ってゐて、世話をやいて派手なリボンを取ってきた。娘を美しく粧ってやるのは嬉しいことだった。何でも大仰なのがよいのだと思って、大きく結んだ。鏡の中で泉は、一ことの前ぶれもなく突然おそってきた例の懐疑に暗い顔附をしてゐる自分自身をみつけた。それはどんなに、赤い大きなリボンと対照して道化じみてゐたことだらう。

（なんのために私は、かういそいそと粧ふのだらう――）

「粧う」という、今まで当たり前のように繰り返していた行為に疑問を抱き、それが母親の女性観、古い価値観に属するものであったことに気づくのである。まだ明確に意識されてはいないが、女性とはどのような存在かという、根源的な問題意識がここには提示されている。

そして、朝食時に痛ましい新聞記事を読みつつも、騒がしく貪り食う父親を、「酷薄さを帯びた痛烈な瞳」で見つめる。「このままの生活で果していゝのだらうか――」泉は不安な思いを抱き、洋裁学校へ出かける途中、良子に出会う。

彼女は背が高く、恰幅も堂々として日に焼けた少女だった。良子は秀才をもって自他共に許してゐた。（中略）

良子は社会科学班へ入って、マルキシズムの解説講座にも出、在外父兄救出学生同盟で、引揚者の診療班へ廻って活躍してゐるのだ、と言ってゐた。マルクスだの、エンゲルスだの、いろんなことばが洪水の如く泉をおそって来て、彼女をおどろかした。

良子に圧倒されて、「泉はすっかり自己卑下に陥って」しまい、「自分がみじめになる。泉は、しかし、彼女の話を聴くなかで、ふと疑問を持つ。本当に良子はすばらしいのか、心の奥底からの思いで行動していることなのか。世間の風潮に流されているだけではないのか。

両親に向けられた懐疑的な視線は、今度は、良子にも向けられることになる。

良子も亦、さういふほどに、すばらしくはないんだとおもったりしてみた。それは、少女にありがちな、対抗意識や負け惜しみの変形かもしれなかったが、しかし泉は何かしら、きっとさうだ、とだん〳〵確信していった。（このひとは、あんないっているが、未だ、私のもとめる真実の生活にはふれてゐない）泉は夢みるやうな瞳をして考へた。

泉は、良子の生き方に憧れつつも、冷徹な眼で見つめているのである。

新しい世界の少女たちは、たとへそれが、薄っぺらな雷同的な、虚勢的なものであらうと、何にせよ互に摩擦しあって逞しい成長をとげようとしてゐるのである。泉のやうにいたづらに苦しんでゐるよりは勇敢だし、立派だ。彼女たちのすさまじい生活意欲の前にはとてもかなひはしなかった。

マルクスやエンゲルスや、さまざまな活動について語る中で、良子のふともらしたひとこと「田舎からの仕送りだけぢや、食費も出ないの。一日ぢゅう、一分も休みなし」「とても疲れるわ」という言葉から、泉は良子は幸福ではないのだと直感するのである。「薄っぺらな雷同的な、虚勢的なもの」と看破している。なんと冷徹なまなざしであろうか。

田辺聖子の小説には、周囲の人間や社会に対するシニカルな視線をもち、置かれた状況の中で、真摯に自らの生き方を追求する女主人公が多く登場する。彼女たちは、「正しいこと」を表立って声高に主張することはない。「ハイ・ミス」シリーズや「姥ざかり」シリーズに登場する女性たちは、生き生きと自分の人生を楽しんでいる。田辺聖子が描く女性たちの生き方は、ささやかな日常茶飯事をこそ大切にする中に、自らの「幸福な人生」を具現している。「十七のころ」に登場する泉を描く中に、すでに、そのような視座を見出すことができるのである。

良子と出会って帰宅後に、泉は、彼女の人生の目的を結婚にあると決めつける母親の言葉に反発し反抗的な物言いをする。しかし、すぐに自らを省みてしまうのである。

泉はわれに反つた。今まで何をいひ出してゐたのか、すつかり分らなくなつた。あるのは空虚なそらぞらしさのみである。世の中の荒い波風を両親に遮つてもらつてそのかげで成長しようとする自分の姿には気附いてゐるのだつたが、しかしどうすればいゝか――泉はこれ以上、疲れて考へたくなかつた。

社会的に何の責任も果たし得ない無力な自己を省みて、思考停止の状態に埋没してしまう。

このような泉の苦悩は、しかし、旧弊な両親に反抗する娘という単純な構図の中で描かれることはない。娘に注がれる両親の濃やかな愛情と、両親の愛情を蔑ろにはできない娘の気弱さをも合わせ描いているところに、この作品の優しさがある。母親のふとした仕草や、父親の言葉が、娘への愛情に溢れた言動として描かれていることも、この作品に温かみをあたえている。

① 母親は紫に白い井桁の大きく飛んだ若々しい柄の銘仙を縫つてゐた。

「泉ちやん、これあんたのよ。きつと似合ひますよ」

とり子は楽しくてならず目を細めて裁布を高くかかげ泉の肩へ当がつてみて美術品でも見るやうに首を反らせて眺める。

② 「おまへ、元気ないで。もつと元気出しや。どや、こんどの日曜、京都へでも行こか。何か買ひたいもん、あるか」

自らの生活に疑問を抱き、両親に反発し、父親を酷薄な目で見つめつつも、両親の愛情は十分に理解している泉。良子とつきあわないようにと諭す母の言葉に反発を覚えながらも、泉は頷くことしか出来ない。「父母に心配をさせるのは悪いと思ひ素直に答へ」るのである。旧弊な家庭の中にも確かに「幸福」はある。だからこそ、泉の悩みは深い。

6、泉の未来を暗示する自然描写

両親の価値観に従って、彼らの引いたレールの上の人生を生きるしかないのか。悩み抜いた末に、思考停止に陥った泉は、呆然として戸外にさまよい出る。「妙にさびしい、底なし沼のやうに手応へのない夕やみが、辺りに迫つてきた。突然、仰へ様のない悲哀と絶望の感が泉の胸におしよせた」と描かれる迫り来る夕闇は自らの無力さに絶望する泉の心象風景ともいえる。

そして、「十七のころ」の泉の物語は、次のような場面で終わる。

新らしい世界は芽生えつつある。

泉はおのれの尊い青春の日をいとほしみ、無為な生活だと思ふと、しぜんに頭をたれ、赤松の幹にもたれてすすりないた。

しかし泉に何が出来るだらう。彼女は又明日から洋裁へ通ふだらう。そしてワイシャツを縫ひ、無駄話もするだらう。生活に足らぬものがなく、着物も作るだらう。

しかし泉はすすりなきながら、これは決してあたしの望んだ生活ではないのだ、とくりかへし〳〵考へるのだつた。

作品は、泉に解決の糸口を与えないままに終わる。しかし、結末で、両親の愛情にがんじがらめになり思考停止に陥っていた泉は、再び「くりかえし〳〵」考え始める。「十七のころ」は、いつかは未来に向って一歩を踏み出すであろう泉の姿を暗示して終わるのである。

解決のない泉の物語の中で、「新しい世界は芽生えつつある」という一文は、唐突の感は否めないのだが、しかし、この一文は、泉が良子に出逢う朝の光景を想起させる。すなわち、「もう庭には一ぱいに明るい新緑が流れてゐる。目覚めるばかり、萌え出た緑だつた」と描かれる明るい五月の初夏の光景を連想させるのである。萌え出たのは、草木の緑ばかりでない。道すがら泉の眼に映し出される美しい自然の息吹は、日々の苦しみから泉を解き放ってくれる。作品中で、もっとも美しい場面である。

日ましに色づいてきた、珊瑚珠のやうな苺が、露を含んでぬれた葉の蔭からのぞく。麦の背は高くそして黄ばみ、豌豆は豊かに青い舟をつけ、玉葱の畠はひろくつづいてゐた。池端の製材所からは景気のよい物音がどよめいて、あたりの稀薄な黄金いろの大気を乱した。竹垣の中の材木置場には雨ざらしの長い角材があまた横はつてゐたが、その下におしへがされた雑草にも一様に美しい緑の色が流れてゐた。すくすくと、高いポプラの梢を湯気のやうにかるく薄くかすめた雲は、遠い山脈のうへにたゆたうてゐる。ガラス板を横から見たやうな透明な蒼空が、はてしなくひろがり、国道を越えて文化住宅の屋根の色瓦が輝いてゐた。祝福すべき五月の朝だつた。そよ風は流れ、鳥はうたつてゐた。泉は幸福な思ひに打たれた。

新しい季節の始まりは、泉の心の中での、新しい世界への旅立ちを予感させるものである。豊穣な自然の営みを目にした泉は「幸福な思ひに打たれ」る。作品中の随所に、晩春から初夏へ移りゆく季節の景物が描かれ、それらは、刻々と揺れ動き変化する泉の心象と分ち難く結びついている。自然描写は、泉の物語を美しく彩っているのだが、なかでも、この初夏の朝の光景は重要な意味を持つと考えられる。幸せそうな泉が描かれるのは、この場面だけであるからである。

泉が心の底から望む新しい世界と真摯な生き方が、どのようなものであるのか、明快な答えは提示されてはいない。が、彼女の未来を予祝するかのような、生命力に満ちた初夏の息吹こそ、泉が心の底から希求する本当の生活のありようを示唆するものであろう。人間もまた、せいいっぱい幸福に生きて行かなくてはならない。何ものにも妨げられない、生き生きとした生命力の発現の中にこそ、真の生き方はある。十七歳の頃の田辺聖子の強いメッセージが読み取れるのである。

おわりに　ー「十七歳」への思いー

田辺聖子の作品の中には、戦争によって大きくゆらいだ女性の生き方を描いた作品が多いことは、意外に知られていない。故郷の福島を舞台に戦前戦後を生き抜いた女性を主人公にした『花狩』（東都書房、昭和三三年）、軍国少女であった自画像を描いた『私の大阪八景』（文藝春秋社、昭和五〇年）や『欲しがりません勝つまでは』（ポプラ社、昭和五二年）、戦争により生涯を独身で過ごさざるを得なかった女性の生き方を、戦争犠牲者への哀惜を込めて描いた『おかあさん疲れたよ』（講談社、平成四年）、「昭和」という時代の証言ともいうべき『楽天少女通ります　私の履歴書』（日本経済新聞社、平成一〇年）や『田辺写真館が見た「昭和」』（文藝春秋、平成一七年）等々、田辺聖子は一貫して戦争戦後を女性の視点から描いてきた作家である。

自伝小説『欲しがりません勝つまでは』の「あとがき」にはこう記されている。

この本を、あの時代に共に生きて、ともに学徒動員で工場で働き、空襲で散った多くの学友に捧げたいと思う。今年―昭和五十二年は、日本中でたくさんの死者の三十三回忌がいとなまれるはずである。何となれば昭和二十年の空襲で命をおとした人間は何十万といるのだから。

死者は黙してかたらない。私たちは彼らのことをもっとよく知ってやらねばならない。若い人たちに私がかたり継ぐ、これが「私」の戦争である。

そのような田辺聖子にとって、「十七歳」は特別な年齢であった。「敗戦は十七歳のわたしにとって驚天動地のできごとであった」[9]と言うごとく、また、「終戦の日、十七歳の私は焼け跡に立ちました。あれから五十年。この褒章（紫綬褒章）はお上からいただいたとは思いません。戦後、私たちの世代が築き上げてきた日本からいただいたのだと、受け止めています。」[10]と語るごとく、「十七歳」という年齢は、人生で最も大きな体験であった終戦の記憶と分ちがたく結びついているのである。

『欲しがりません勝つまでは』の最終章は、次のような「十七歳」の心の叫びを

記すことによって締めくくられている[11]。

私は十七歳、嵐のようにざわめいているこの時代に、手に持つ武器は何にもなかった。

天が地に。

地が天にひっくりかえった。

十七年間たたきこまれた世界観も価値観もくるりと逆さまになった。

それでも遠い物音に耳すますように、私は考える。何かしら、忘れ物をした、それを思い出すように……。

これから、どう生きるかについての心がまえのようなものだ。

(もう誰のいうことも信用でけへん)

と私は思っていた。

(自分の頭で考えて判断するのが一ばん大事やないかしらん)

と考えるようになっていた。

人に押しつけられた考えでなく、自分の胸の奥そこの、遠い遠い声に、耳をかたむける、そのこと以外に、自分の行動をきめるものはないように思われる。戦争のあいだ中、「み民われ生けるしるしあり」と教えられたけれど、ほんとうに「生けるしるし」生き甲斐を感じたことは一度もなかった。

いつも重くるしい圧迫感をかんじていた。

自分の後半の人生は、きっと自分の遠い心のおくそこの声だけを聞く、他人にあやつられない人生でありたい、と思いはじめていた。

漠然としてつかみどころのないながらに、烈しい希求のようなものを私は感じた。私は十七歳、なんの力もなからこそ、よけい、やみくもに、

(生きたい!)

と思ったのかもしれなかった。

十七歳の時に迎えた敗戦。これからは、ほんとうの気持ちをさぐりあてる力を持たなければと書いている。この少女は、まさしく「十七のころ」の泉である。

後年、歳月を経るほどに「十七歳」への思いはいよいよ強くなり、生涯忘れ得ぬ年齢となっていったことを考え合わすならば、「十七のころ」は、まさに、その「時」を描いた、田辺文学の原点と位置づけられるべき作品なのである。

注

(1) 住友元美「田辺聖子『十七のころ』(資料紹介)」(『樟蔭国文学』四九号、平成二四年三月)。以下、「十七のころ」本文の引用は同文による。

(2) 読売新聞(平成二四年三月二五日朝刊)、朝日新聞(平成二四年四月一一日夕刊)、産経新聞(平成二四年四月二一日朝刊)。

(3) 『海賊島』、『春愁蒙古史』、『光と共に』、『花欄物語』、『北京の秋の物語』、『最後の一人まで』、『エスガイの子』等々がある。各作品の内容は『欲しがりません勝つまでは』(ポプラ文庫、平成二一年)を参照。

(4) 昭和五二年の三月〜昭和五四年一二月まで『別冊文芸春秋』に連載された自伝小説。のちに『田辺聖子全集(1)』(集英社、平成五年)に所収。本文の引用は、後書による。

(5) 『青い壺』(本学図書館所蔵)については、拙稿「『青い壺』のこと」(樟蔭学園報『くすのき』一五〇号 平成一八年三月三日)を参照。

(6) 対談「上方に上品のあり」(『ユリイカ』平成二二年七月号所載)による。

(7) 朝日新聞(昭和二〇年一一月一四日)。

(8) 朝日新聞(昭和二一年九月二四日)。同紙には、他にも「親子心中か」(同年一一月一四日)、「二児を殺して服毒」(同年一〇月九日)等の記事が載る。

(9) 『月刊面白半分』昭和五〇年三月。

(10) 紫綬褒章受章の言葉、産経新聞(平成七年四月二八日夕刊)。

(11) 『欲しがりません勝つまでは』(ポプラ文庫、平成二一年)による。

【付記】本稿は、田辺聖子文学館開設五周年記念特別講演(平成二四年六月三〇日)「田辺聖子・少女時代の作品〜『十七のころ』を読む〜」の内容に加筆したものである。

On “In Seventeen,” the Manuscript by Tanabe Seiko

Faculty of Liberal Arts, Department of Japanese Language and Literature
Shuko NAKA

Abstract

Tanabe Seiko’s manuscript “In Seventeen,” a short story written when she was a student of Shoin college and still unpublished, was recently discovered and exhibited. Although the presence of the work was previously introduced in her autobiographical novel, *Shinnko-Zaik no Saru ya Kiji* , its content or whereabouts have been unknown. This paper examines “In Seventeen” and points out Tanabe’s consistent subjects in her very early works: theme of post war women’s life, characterization through speech effectively using a Osaka accent, and a witty, polished style with a sense of humor. The age seventeen has a special meaning for Tanabe. When she was seventeen years old, the war ended, and she started her independent life self-consciously and self-reliantly. This story which describes an awakening to life of a seventeen-year-old girl can be recognized as the beginning of Tanabe Seiko’s literary career.

Keywords : Tanabe Seiko, “In Seventeen”, Osaka Japanese, World War II